



資料館報

第43号

編集 令和5年3月31日

発行 高森町歴史民俗資料館
長野県下伊那郡高森町
下市田 2243
電話 (0265)35-7083

印刷 (有)雨宮印刷
電話 (0265)22-6027



目次

○あいさつ	2	●ミニ平和展	
○令和4年度事業報告	3	●町民ギャラリー展	
○資料館委員会等の記録	4	○親子体験教室・小正月飾り作り	9
○「時の駅」講座	5	○学校・地域との連携	9
○令和4年度企画展・特別展	6~8	○資料館活動の様子	10
●五月人形と武具展		○研究調査報告	10~17
●寺澤畊夫とユタ日報		○令和4年度の記録	18~19
●棚田泰生展		○令和4年度資料寄贈者	20
●高森にも電車がやってきた		○お知らせ	20
～山吹駅・市田駅開業100年～		○編集後記	20
●ひな人形・美人画展			

◎ ごあいさつ



高森町長 壬生照玄

3年以上の長きにわたる新型コロナウィルス感染症は、地域の行事やイベントなどの縮小や自粛の決断を迫られ、私たちの生活を大きく変化させました。しかし、今年は3月中旬から4月上旬で各地区の寺社に奉納される「獅子舞」などを再開するとお聞きしています。春の訪れを告げる勇壮なお祭りが楽しみですね。

町では、令和3年度までに資料館でまとめていただいた「高森の道」を元に、ふるさと高森町に古来より伝わる道標や街道を紹介する「魅力発見町あるき」を開催し、今年は4月8日の「吉田古城 桜まつり」に併せて行います。吉田の古城には、昨年新種の桜として認定された「高森古城桜」があります。吉田城址愛護会の皆さんによる永年の保護活動により護られてきた、大判で多弁な「高森古城桜」は、一輪一輪が美しく、非常に見応えがあります。ぜひこの機会に、町の新たな魅力として知っていただければ幸いです。

また、昨年同会は、これまでの保護活動が認められ、財団法人日本さくらの会より「さくら功労者」として表彰されました。この紙面をお借りし、町民の皆さんにご報告させていただき、これまでの地域の皆さんのご尽力に、心より敬意と感謝を申し上げます。

今後も、町の歴史や文化財、地域資源を知っていただき、町民一人ひとりが地域をつなぐ一員としてご活躍されることをご期待申し上げます。

高森町教育長 高野正延



4年ほど前のことです。数名の中学生と共に、時の駅で土器の修復作業を体験させてもらいました。

遺跡から掘り出された土器のかけらに付着している土を、ブラシや筆を使って水でていねいに洗い落としました。そして、模様が確認できるようになった土器片を、まるでジグソーパズルのように並べていきました。破片の組み合わせや接合する向きを、いろいろに変えながら復元していくのです。頼りになるのは、破片の形や色とそこに描かれた文様しかありません。気の遠くなるような作業だと思いました。

しかしそれだけに、破片がうまくつながった時の感激は大きかったです。学芸員さんに確認して、これでよさそうだと分かると、中学生たちは「やったあ」と歓喜の叫びをあげていました。根気のいる地味な作業でしたが、思いのほかその仕事に熱中していたようです。ゲームのような意外性と成功感を味わえるという独特の魅力と共に、自分のルーツに触れるなつかしさが潜んでいたからだと思います。

資料館「時の駅」はこれからも、子どものみならず全ての町民の皆様に、歴史や文化に触れる学びの場を提供していきます。さまざまな企画を検討してまいりますので、いっそうのご利用をお願い致します。

資料館運営委員長 下沢貢



日頃より町民の皆様には資料館「時の駅」の運営にご理解ご協力を賜り誠にありがとうございます。当館は町の格別なご配慮により、空調設備の完備、全館LED取り付け、屋根の塗装塗り替え、水道洗い場の改修等々により、快適な学習空間に生まれ変わることができ深く感謝しております。

さて、コロナ禍の中、本年も県や町の指示を受け、感染防止対策を立て対応してまいりました。お陰様に事業は当初の計画にそって進めることができたと考えております。特に学校利用・企画特別展・時の駅講座・夏休み親子体験教室・調査委員による調査活動・古文書の整理等々においては、まさに「継続は力なり」の通り、そこには新たな発見があり、それらは積み上げられた「町の財産」として、これからも町民の皆様に還元、活用されるよう工夫していかなければなりません。

社会教育の拠点としての資料館「時の駅」は来館者が一人であっても100%の力で対応できなければなりません。当館では「そこに行けば、人の温もりがあり、明るく、清潔で、安心できる学習の場」づくりをこれからも進めてまいります。勤勉で専門性の高い職員がお待ちしておりますので、町民の皆様には「学びえたものを我がものとせず」の意気込みをもって足を運んでいただきたいと思います。

令和4年度 事業報告

館長 塩澤元広

高森町歴史民俗資料館「時の駅」では新型コロナウィルスの感染が終息しない厳しい状況の中ではありましたが、町内外の多くの方々にご利用いただきますとともに厚いご支援を賜り誠にありがとうございました。

ここに令和4年度の事業報告をさせていただきます。



(1) 企画・特別展

①企画展「五月人形と武具」	4月 23日～ 5月 26日	534名
②特別展「寺澤畊夫とユタ日報」	7月 2日～ 8月 7日	866名
③特別展「棚田泰生展」	9月 3日～ 10月 2日	375名
④特別展「高森にも電車がやってきた～山吹駅・市田駅開業100年～」	2月 18日～ 3月 19日	997名
⑤企画展「ひな人形と美人画」	2月 23日～ 4月 9日	984名 3月31日締
⑥ミニ平和展「高森から NO WAR!」		

「ユタ日報に見る太平洋戦争中の日系人の思い」 8月 7日～ 8月 31日

⑦町内小中学校作品展（中学校10月、南小11月、北小1～2月）

(2) 資料館講演会「時の駅」講座

①第1講座「ヤマト政権の確立に関わった古墳時代のイナ谷」	7月 9日	長野県考古学会会長 小林正春氏	35名
②第2講座「伊那谷の日本画家～棚田泰生を中心に～」	9月 10日	飯田市美術博物館学芸員 小島淳氏	11名
③第3講座「江戸時代の土づくりに学ぶ～『おじいさんは山へ柴刈りに』に関わって～」			
	12月 3日	伊那谷民俗学研究所事務局長 松上清志氏	29名

(3) 親子体験教室

①夏の親子体験教室（教委ブンカザイルキッズ連携も含む）

・第1講座「富本鏡レプリカ」・第2講座「まゆから糸取り・人形づくり」	7月 30日(土)	32名
・第3講座「勾玉づくり」・第4講座「土器づくり」	7月 31日(日)	50名
・第5講座「トンボ玉づくり」・第6講座「火起こし」体験	8月 6日(土)	28名
・土器の野焼き 11月 23日(日)		

②小正月飾り体験教室 1月 9日(月)に新型コロナ感染防止のため餅つきと飾りづくりのみ行った。参加者 37名

(4) 古文書研究会

- ・毎月第3木曜日に学習会を開催した。
- ・2月 16日(木)に会員による特別研究会を行った。(高森町の井水についての古文書を読む②)

(5) 高森町史を読む会

- ・毎月第4木曜日に学習会を実施した。
- ・1月 28日(土)に飯田市美術博物館青木隆幸氏の特別講演会を行った。参加者 33名

(6) 委員会の活動

- ・資料館運営委員会 資料館の運営について協議 3回開催 (他に小正月飾りで1回)
- ・資料館調査委員会 町内社寺にある奉納額の調査を始める 5回開催 (小正月飾り作りへも参加)
- ・資料館活用委員会 年3回 小中学校、図書館と、資料館活用方策等について協議

(7) 学校連携事業

資料館と学校が連携して授業を実施した。(P9参照)

(8) その他の取り組み

- ①蚕の飼育・大正月飾りは例年通り行った。
- ②古文書整理作業は吉田「中塙家文書」目録の製本、下市田「北原家文書」、同「中村忠敬家文書」、山吹「三石家文書」、出原「宮下家文書」の整理を行った。
- ③刀の手入れ作業 (中塙美弘氏)
- ④初めて小学校へ入学した家庭に冊子「高森の人」を寄贈した。

(9) 入館者数 6,353名 (昭和54年開館から累計 278,541名)

見学はもちろん、多くの団体に施設を利用していただいた。(P18,19参照)

資料館 委員会等の記録

1. 資料館運営委員会

〈委 員〉

下沢 貢 座光寺 永子 北沢 彰利
北原 みどり 宮原 祐敬

〔運営委員会の主な活動〕

○定例委員会4回

- ・資料館「時の駅」の運営に関わりさまざまな提言をした。また、夏休み親子体験教室、小正月飾りづくり教室の指導も行った。

2. 資料館調査委員会

〈委 員〉

(山 吹) 橋都 洋治	山路 文夫
(吉 田) 中塚 敏彦	
(下市田) 唐木 孝治	手塚 浩司
松村 一	
(上市田) 林 祥三	
(牛 牧) 林 治巳	
(大島山) 佐々木 一寿	
(出 原) 福沢 茂樹	塚平 隆

〔調査委員会の主な活動〕

○定例委員会5回

- ・「掲額・絵馬」の調査について、調査カードをもとに各地区の調査を実施した。
- ・小正月飾りづくりでは、飾りつけの指導をした。

○委員研修視察旅行

- ・今年度は実施しなかった。

3. 古文書研究会

〈組 織〉

会 長	矢澤 篤 (上市田)
副会長	宮下 明子 (中川村)
会 計	畠中 定喜 (出 原)
監 事	鈴木 信孝 (下市田)
講 師	吉澤 章 (飯田市)
顧 問	福島 壽子 (下市田) 手塚 勝昭 (吉 田)
幹 事	塩澤 元広 小林 和子 (資料館)
会 員	26名 (内13名は町外の会員)

〔活 動〕

○定例会 (毎月第3木曜日)

- ・上伊那、中山道関係の古文書や研究会発行の月報に掲載されている古文書を、講師の吉澤さんに解説していただき読み深めた。

○館外研修 (7月21日)

- ・江戸時代の小野宿を中心に初期の中山道、伊那谷北部地域へ出かけ研修した。

○古文書特別研究会 (2月16日)

- ・今年度も昨年度につづき、水論についての古文書をテキストに、3人の発表を皆で検討し合う形式で学習を深めた。

4. 高森町史を読む会

〈組 織〉

会 長	松上 清志 (下市田)
副会長	羽生 宏敬 (下市田)
監 事	手塚 勝昭 (吉 田)
会 計	小林 和子 (資料館)
会 員	22名 (内1名は町外の会員)

〔活 動〕

○定例会 (毎月第4木曜日)

- ・8年目を迎えた町史を読む会では、「近世」の項目を読み進めた。現地学習は、地元の田切崇穂氏を講師に上市田地区の歴史を実地で学んだ。

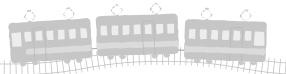
○特別講演会 (1月28日)

- ・青木隆幸さんを講師に迎え「飯田城 そぞろ歩きのコツ～殿、案内をかって出る～」と題して講演を行った。

5. 資料館活用委員会

- ・高森南小学校、同北小学校、高森中学校、高森町図書館の関係職員で構成し、年3回、資料館の有効活用について検討した。

第23回 充実の「時の駅」講座



今年度は下記のような日程で、新型コロナウィルス感染防止対策を施し、「時の駅」を会場に行いました。時の駅講座の講演記録は、資料館または資料館のホームページにあります。

第1講座『ヤマト政権の確立に関わった古墳時代の伊那谷』

7月9日 35名受講

講師：長野県考古学会会長

小林 正春 氏



古墳時代中期以降のわが国の古代国家「ヤマト王権」が確立していく過程に、伊那谷がどのようにかかわったのかを中心に、5世紀以降、複数の形式の前方後円墳が出現したことと「馬」にまつわる遺構・遺物を関連させながら、座光寺・高森になぜ富本銭が出土したのか、古代の役所「伊那郡衙」はどのように成立したのかに迫る興味深い新説を示していただきました。

第2講座『伊那谷の日本画家～棚田泰生を中心に～』

9月10日 11名受講

講師：飯田市美術博物館学芸員

小島 淳 氏

日本画の成立を推進したのは、日本美術の近代化を目指した岡倉天心指導下の日本美術院ですが、その活動は以後の日本画の大勢に感化を与え、戦後から現代にいたるまでに様々な新様式を生み出しました。その過程にあって下市田から上京して、森白甫に師事し、中村正義の感化を受けた棚田泰生は、新傾向の画風を貪欲に取り入れ、日展に作品を寄せました。早逝は惜しまれますが、小島講師と共に故郷に残された作品を鑑賞しながら、画風の変化に棚田泰生の苦闘を偲ぶことができました。

第3講座『江戸時代の土づくりに学ぶ ～「おじいさんは山へ柴刈りに」に関わって～』



12月3日 29名受講

講師：伊那谷民俗学研究所事務局長

松上 清志 氏

桃太郎話をきっかけにして柴刈りと肥料としての刈敷の重要性を認識し、隣村との訴訟問題にも発展する事例を確認しました。土づくりの歴史を振り返ることで、炭素循環農法などは昔からの土づくりを踏まえたものであることを再認識することができました。ウクライナ問題が世界中の話題になる中、効率や多収益のみを重視する現代農業のあり方に警鐘を投げかける講演でした。

令和4年度企画展・特別展

企画展『五月人形と武具展』

4月23日～5月26日 入館者534名

今年も座光寺氏の甲冑や資料館寄託・所蔵の刀剣類を展示しました。また、町内より寄贈いただいた五月人形や座敷幟・兜飾りなども展示しました。今年は、五月人形に関わるつるし雛も飾られました。恒例の企画展ですが、刀剣類は関心をもって見学していただき、新たな寄贈もありました。



特別展『寺澤畊夫とユタ日報』^{うねお}

7月2日～8月7日 入館者866名

戦前の山吹に生まれ、地元の青年会で活躍しながら24歳でアメリカに渡り、日系人のための日本語新聞『ユタ日報』を創刊した寺澤畊夫の苦難の生涯とその業績を紹介しました。多くの資料がユタ州と関係が深い松本にあり、地元であまり知られていませんでしたが、今回の展示で新たな偉人を知ることができたと反響を呼びました。ご子孫の方から感謝の言葉もいただきました。



特別展 『棚田泰生展』

9月3日～10月2日 入館者375名

棚田泰生は下市田出身の日本画家です。今回、一昨年資料館に寄贈いただいた作品を含め、大作「納沙布」や遺作「窯場」など地元に残る代表的な作品28点を展示し、第2回時の駅講座を絡めて特別展を企画しました。新傾向の画風を貪欲に取り入れ、新たな日本画を創造しようとした泰生の生きざまに感動したというアンケートが多く寄せられました。特別展後、中学校へ作品を移し鑑賞する機会も持てました。



特別展 『高森にも電車がやってきた～山吹駅・市田駅開業100年～』

2月18日～3月19日 入館者997名

今年度は、山吹駅・市田駅開業100年にあたります。そこで、開業当時の駅周辺の様子や鉄道が地域に与えた影響、現在までの変遷を写真や文書などで紹介しました。地域の皆様のご協力により、古レールやミニチュアのジオラマなど鉄道グッズも展示されました。特に「鉄道と高森」に焦点をあて、鉄道を誘致するために運動した人々の取り組みなどを展示し、当初上段を通る計画だったのが、天竜川対岸の町村や鉄道期成同盟会の誘致活動により現在のルートになった経緯がわかる内容でした。「ふれあいフォトコンテスト」の応募作品、井原久美さんの水彩画展も同時開催されました。



ミニ平和展 『ユタ日報に見る太平洋戦争中の日系人の思い』 『高森からN O W A R !』 8月7日～8月31日

ロシアのウクライナ侵攻が激しさを増し、高森にも避難された家族が到着する中、太平洋戦争中の日系人について扱った『寺澤畊夫とユタ日報』展に関連したミニ平和展が開催されました。戦時中の日系人の苦悩の事実が語られ、戦後その誤りを米国大統領が認めたことなどを展示しました。小中学生に向かってスクラップ新聞づくりを呼びかけた「高森からN O W A R !」コーナーにも子どもたちの関心が集まっていました。



企画展 『ひな人形と美人画』

2月23日～4月9日 入館者984名 3月31日締

恒例の「ひな人形と美人画」展ですが、今回は、公民館美人画教室の皆さん的作品が10点展示されました。また布喜（ふき）の会の皆さん製作のつるし雛の展示とコラボ企画の「つるし雛手作り体験～親子でうさぎを作りませんか？～」を開催しました。ひな人形は大正時代以前の内裏雛1組が寄贈され、貴重な資料が増えました。



『町民ギャラリー展』小中学生の作品展示(10月～2月)



高森中学校美術部



高森南小学校



高森北小学校

夏の親子体験教室と小正月飾りづくり体験教室

今年の夏の親子体験教室も、新型コロナウィルス感染防止対策をとり、人数制限を設けて実施しました。今年も6講座（富本銭づくり・まゆから人形づくり・勾玉づくり・土器づくり・トンボ玉づくり・火起し）を7月30日・31日・8月6日の3日間で計110名の皆さんに楽しんでいただきました。11月23日には、作った土器の野焼き体験も行いました。

小正月飾りづくり体験教室（1月9日）では、37名の親子・委員の皆さんのが参加し、晴天のもとで餅つき、もち花・まゆ玉づくりを体験することができました。



学校・地域との連携

町内の小中学校を中心に、今年多くの学校で校外学習や出前授業に利用していただきました。

- | | |
|----------------------|--------------------|
| ①高森中学校2年生 地域応援隊4回 | ⑦高森南小学校4年生 市田柿の学習 |
| ②高森中学校3年生 総合的な学習 | ⑧松尾小学校3年生 昔の暮らし体験 |
| ③高森北小学校 クラブ活動7回 | ⑨高森南小学校3年生 松岡城体験 |
| ④高森南小学校6年生 歴史学習（富本銭） | ⑩高森北小学校3年生 昔の暮らし体験 |
| ⑤高森南小学校5年生 見学、VR体験 | ⑪高森南小学校4年生 昔の暮らし体験 |
| ⑥高森北小学校6年生 歴史学習 | ⑫高森南小学校3年生 昔の暮らし体験 |

◇そのほか「駒ヶ根つくば開成学園」の見学、「エコール親愛」・「みらい福祉会」（2回）の皆さんのが勾玉づくり・富本銭づくりを行いました。

◇資料館を毎月の定例会場として、短歌、俳句、源氏物語、音読など多くの団体にご利用いただきました。

◇CATVを通して「時の駅によるこそ」（2か月毎）を放送し、町民の皆さんに館の様子を紹介しました。



←高森南小6年
歴史学習



高森北小3年→
昔の暮らし・道具体験

資料館活動の様子

①古文書整理作業



資料館に寄託された文書整理を行っています。現在は、中村・北原・三石・宮下家・大島山区有文書を整理しています。今年度は、中塚家の古文書目録を製本しました。目録をもとに古文書研究会での史料研究など今後の活用が期待されます。

②土器整理作業

発掘された土器の復元作業や図面づくりを進めています。今年度は下市田の堂垣外Ⅰ遺跡の遺物整理を行い、報告書(古代遺物編)の刊行にこぎつけました。整理作業員のお二人は、作業にも慣れ、主体的に整理を進めてくれています。ブンカザイルキッズの活動や高森中の地域応援隊の活動にも協力頂いています。



③清掃作業

毎月2回、館内の隅々まできれいにして頂いています。「布喜の会」の活動に参加される方には「ひな人形と美人画」展への協力もいただきました。

研究調査報告

下伊那北部における飯田線（伊那電）のルートはどのようにして決定されたか

塩澤 元広

一 はじめに

伊那電気鉄道は辰野からしだいに南へ延び、大正12年（1923）1月に山吹駅、3月に市田駅、元善光寺駅、そして8月について当初の目的地である飯田駅まで開業しました。ということで今年はこれらの駅まで開業してちょうど100年ということになります。昨年は日本に鉄道がはじめて開通して150年ということで話題になりました。飯田下伊那はそれから50年遅れて鉄道が走るようになったということです。この地に鉄道が開通するまでには、多くの人のさまざまな苦労と努力がありました。今回はその一端を下伊那北部の人たちの取り組みからみてみたいと思います。

二 下線誘致運動のはじまり

表1 上線と下線の比較（七久保—飯田間）

	線路用地	停車場用地	
上線	67,857坪	3,899坪	
下線	104,173坪	6,539坪	
	道路開拓 変換変更用地	里程 (哩)	合計
上線	3,800坪	10哩余	75,556坪
下線	4,598坪	128哩余	115,310坪

表1は、伊那電気鉄道株式会社（伊那電）が七久保—飯田間の鉄道ルートについて測量・調査をした結果をまとめたものです。上線とは三州街道

沿い(上段)のルート、下線とは天竜川に近い(下段)現在の飯田線が走るルートのことです。県や伊那電は当初、伊那町以南は三州街道に沿ったルートを考えていました。それは表を見ての通り、上線のほうが距離が短かいからでした。潰地(買収地)は坪数にして3万9,754坪も上線のほうが少ないので、経費がかなり安くできます。それなのになぜ下線のルートになったのでしょうか?

それは下伊那北部・上伊那南部の村々の中から、盆地の中央部(下段)を通したほうがよいと主張する人たちが出てきたからです。伊坪達郎氏によると、それがもっとも早く現れるのは明治44年と思われるといいます。この年の10月、下伊那18ヶ村、上伊那4ヶ村の代表者が「伊那交通問題二付請願書」を県に提出します。これは、県は伊那町以南では三州街道沿いのルートを考えているようであるが、「比較線」として上伊那南部と下伊那の中央部、天竜川の竜西沿岸を通るルートの測量もしてくれるように求めた請願です。その理由として、このルートは郡の中央部を通るので人家が多く、土地は広く、また物産も豊かであると。そこでここを通した方が物資の集散や人の移動に便がよくなるといっています。明治44年10月というと、伊那電の辰野—伊那松島間が同年2月に開通したので、つぎの伊那町までの建設にとりかかっている時でした。鉄道が自分たちのところ、上伊那南部や下伊那北部にまで来ることが現実味を帯びてきて、動き出した人たちがいたということでしょう。この請願書を出した人は32人ですが、村長が出している村と村内の一地区の代表者(区長や惣代)が出している村に大別されます。村長・助役が出しているのは、片桐村、飯島村、南向村、河野村、生田村、大鹿村、喬木村、下條村、富草村、平岡村、大下條村、千代村、竜丘村、下久堅村、松尾村、神稲村の16ヶ村で、竜東の8ヶ村はすべてふくまれます。これにたいして区長や惣代が出しているのは、上片桐村、大島村、山吹村、市田村、座光寺村、上郷村の6ヶ村でこれらはすべて竜西の村です。

つぎにこの人たちの動きが表面化するのは大正3年(1914)です。この年は赤穂(駒ヶ根市)

まで鉄道が延びてきた年です。下伊那にだいぶ迫ってきました。そこで生田村(9人)、河野村(7人)、神稲村(12人)、座光寺村(4人)、市田村(1人)、山吹村(4人)、大島村(1人)の計38人が神稲村役場に集まります。そして「軽便鉄道ヲ飯島ヨリ以南龍西線沿道へ測量線選定運動ヲ開始スル事」を決定します。「龍西線」とは先の下線のことをいっています。そして前記の7ヶ村に喬木村を加えた8ヶ村より各村1名ずつ委員をえらぶこと。さらに専務委員を4名選び、それは竜西から2名、竜東から2名それに神稲村村長が加わることとし、片桐達治(神稲村長)、今村禄七郎(座光寺村)、片桐良弥(神稲村)、芦部丑太郎(河野村)、矢澤豊之助(大島村)の5人が専務委員となります。事務所は神稲村役場に置くこと。委員は実地踏査をすること。伊那電に意見書を、県には陳情書を提出すること。上伊那南部の村々にも賛同をもとめること。そして運動費にあたる寄附金の割合を表2のようにきめました。

表2 各村の運動費の負担(大正3年)

村名	生田村	河野村	神稲村	喬木村
金額	8円	12円	20円	10円
村名	大島村	山吹村	市田村	座光寺村
金額	10円	5円	10円	20円

この時が正式の組織的な誘致運動の始まりといつてよいでしょう。この会合は神稲村で行われ、同村からの参加がもっと多いこと、また専務委員4名のうち村長を含めて2名が神稲村であり、事務所も神稲村役場におかれしたことから、この日の会合設定と運動の組織化の過程で神稲村が主導的な役割をはたしていたことがわかります。また運動の経費は各村からの寄附金でまかなうことになりましたが、表2でわかるように、神稲村が20円と座光寺村とならんで最も多く支出することを決めています。同村のこの運動にかける意気込み、熱量の大きさが伝わってきます。さっそく3日後の3月29日には専務委員5人が集まり、伊那電と県に提出する意見書、陳情書の原案を作成しています。(この運動を始めた人々は段丘下段に敷設をめざした路線を「龍西線」「中央線」などとよんでいますが、道路にも竜西線や中央線がありまぎらわしいので、この稿では、こ

れからは先の伊那電の作った表1にならって「下線」とさせていただきます)

三 下線誘致運動の経過

大正4～5年ころ下伊那郡会が県に提出した「伊那電車軽便鉄道速成ノ義ニ付意見書」があります。このなかで郡会は、交通不便の下伊那郡、その解消のため郡会は多額の寄付金を県に出したこと。伊那電の飯島以南は、なるべく郡内中央部を貫通することにして竜東など郡全体の利便をはかることは、「郡民多数ノ輿論」であるといっていることが注目されます。下線の敷設をもとめる人々は、郡会にもはたらきかけてその賛同を得ていたことがわかります。郡全体の要望にできたことは、先にみたような鉄道が通る予定のない下伊那南部の天竜川沿岸の村々の賛同も得たことが大きかったと思います。

以上みてきたことは、松川町資料館所蔵の上新井区有文書の中にある電車関係の文書からわかつることですが、高森町下市田区有文書にも同様の文書があります。それは下線誘致を中心になって進めた「有志委員」といわれる人たちが書き残した記録です。中心となって進めたのは市田村の松島喜代太郎、橋都多賀司、林藤四郎、坂牧直助といった人たちで、すべて下市田の人たちです。ここに残っているのは大正6年(1917)以降の誘致運動の記録ですが、この資料からわかつることをあげたいと思います。この下線誘致運動を進めた人たちの組織は、「伊那電軌道同盟会」、「伊那電期成同盟会」などと出てきますが、正式名称はわかりませんので、ここでは同盟会とさせていただきます。大正6年3月2日に神稲村長片桐達治から市田村の同盟会有志委員に、伊那電が電車線路を上線に変更するため、県道沿いに測量を始めたとの知らせが入ります。その理由は、大島村古町地区から線路を開鑿すると飲用水が欠乏するおそれがあるとの声が伊那電本社に届いたからというのです。大島村の矢澤豊之助と神稲村の片桐良弥が協議して、下線誘致運動を進めている委員が集まって対応を協議することになりました。片桐良弥はすぐに同社専務の伊原五郎兵衛に会って事情を聞きただし、さらに上京して社長と面談し

た結果、片桐の見方としては、社長は今まで下線敷設をめざしていたと言うが、古町で飲用水問題がでてきたことと新井地区が取り組みに「冷淡」なことを口実に上線に変更しようとしているのではないか。伊原も飯田町のためには上線がいいと思っているので、それへの変更のきっかけを待っていたのではないかと報告します。そこで委員たちは陳情書を作成し、上京委員を竜東より2名、座光寺より1名、新井より1名の計4名決め、5月4日、社長と会って陳情することにしました。社長が言うには、まだ会社の調査が終わっていないので何とも確答はしがたい、いずれにしても地元の後援は大事にしたいということでした。どうなるにせよ今後も運動の費用がかかりそうなので、各村の費用分担を決めたほうがよいとなり、5月20日の会合で運動費をおよそ1万円とみなし、うち事業家による寄附金が5千円、残り5千円を竜東で6分、竜西で4分に分けて負担することとし、各村の割合を表3のように決めました。竜東のほうが6対4で多いこと。なかでも神稲村が突出していることが注目されます。また河野村も人口に比して負担割合が高いことがわかります。なお事業家による寄附金とは、大鹿村で製材をはじめた久原鉱業株式会社のことと思われます。同社は大正6年大河原の青木谷に入山、そこに大きな製材所を建設し、奥地から伐採した木材を製材してトロッコで部奈まで運び、そこから上片桐駅まで索道で搬出しました。それゆえこの会社にとっても、鉄道は天竜川に近いところにあつたほうがよかつたわけで、そこで同盟会に対し多額の寄附をおこなったと思われます。

表3 各村の運動費の負担(大正6年)

村名	南向村	大鹿・生田村	河野村
負担割合	3厘 (3%)	1分2厘 (12%)	1分3厘 (13%)
人口 (大正9年)	5,699人	7,664人	2,800人

村名	神稲村	喬木村	上片桐・ 大島村
負担割 合	2分5厘 (25%)	7厘 (7%)	1分 (10%)
人口 (大正 9年)	5,481人	8,744人	2,611人
村名	山吹村	市田村	座光寺村
負担割 合	3厘 (3%)	1分2厘 (12%)	1分5厘 (15%)
人口 (大正 9年)	3,111人	6,631人	2,861人

同盟会が大正6年5月に伊那電に提出したものと思われる「伊那電車軌道布設線位置選擇ニ附意見書」が残っています。おそらくこの頃提出した意見書や陳情書のなかでもっともまとまったものと思われます。その中で、下線にした方がよい理由として、

- ・下線は郡の中央を貫通しているので利用しやすい村が多く、その人口・戸数は上線の3倍であること。
 - ・下線のほうが沿線に工場が多く、鉄道による物資の集散が増えればさらにその発達が期待できること。
 - ・元善光寺という一大名勝地は現在年間4万人の観光客を集めているが、鉄道によってさらに増加が期待できること。また台城という古城跡もあること。
 - ・大鹿村の豊富な木材を名古屋の商人が伐採して運搬する計画があり、それに下線を利用できること。また遠山の木材は現在喬木村小川まで索道で運ぶ工事が進行中であり、それができれば下線を利用してさらに大量に遠くへ輸送できるし、同地方から石灰の輸送もできること。
 - ・下線は天竜川に近く、そこの鮎は美味であり、遊ぶ客も多いこと。
- などをあげています。そして下線の短所は距離が長く工事費がかかることであるが、以上の理由から下線は利用客が多いので伊那電の収益が増え、それを十分補えるはずだと言っています。また用

地買収にあたっては自分たちが会社の利便をはかること、停車場の敷地はかなり寄付するとも言っています。この意見書に名を連ねているのは10ヶ村53人の代表です。うち竜東の5ヶ村はすべて村長が入っていますが、竜西の5ヶ村には一人も入っていません。明治44年に県に請願書を提出した時もそうでしたが、竜東の村々は村をあげて取り組んでいましたが、竜西はそうではなかったといえます。それは竜西の村にはどこも上線が通る地域があり、当然伊那電が上線を通ることを期待していた人たちがいたので、一枚岩とはいかなかつたのでしょう。天竜川は長い間通年利用できる橋が架けられず、渡船での行き来が主であり、東西交通の大きな障害となっていました。それが技術の進歩で、明治の末年になってつぎつぎと定橋である吊り橋が架かります。明治40年(1907)の部奈橋、同41年の台城橋、同42年の万年橋、明神橋と続き、明治の末期は吊り橋の建設ラッシュとなりました。これによって対岸への人の移動や物資の輸送が大幅に改善されました。とくに竜東の人々にとって、長い間の悲願が達成されたのです。そして次は鉄道が来るという。できれば天竜川を越えたすぐのところに来れば、それにこしたことはありません。村をあげて一丸となって下線誘致に取り組んだことは当然です。たとえば神稲村、この村で中心となったのは片桐良弥、片桐達治、大原慶一ですが、片桐達治は当時の村長であり、大原慶一は前村長さらに県会議員にもなった人物です。片桐良弥も県会議員でした。村政の実力者のそろい踏みといったところです。このなかでも片桐良弥の果たした役割が大きいと考えます。片桐良弥は田村に生まれた製糸業の実業家で、246釜をもつ大工場に成長させ、三重県にまで支工場を持っていました。そこで得た資金をもとに、明治42年に2万円の私財を投じて個人で明神橋を架けました。南信新聞は、大正6年(1917)4月に下線の敷設を希望する人々が神稲村役場に集まって集会を開いたとき、「片桐良彌氏は単独で五千円までの喜捨を辞せずと、ものすごい鼻息という。」と伝えていました。実際にその「喜捨」があったかどうかはわかりませんが、同盟会の中で神稲村の負担がきわだって多い

のは、片桐良弥の個人負担が多くふくまれていたのかもしれません。先に見たように、大正3年(1914)同盟会が組織化されたとき、彼は5人の専務委員に選ばれています。片桐は天竜川に橋を架け、さらに鉄道を天竜川の近くに呼び込むことで、竜東と竜西の物流を促進することに生涯をかけた人でした。ちなみに片桐は大正7年4月ころから病気になったようで、同盟会の運動に名前がでてこなくなります。おそらく病に伏せっていたのでしょう。そして大正9年7月30日、対岸を走る伊那電を見ることなくこの世を去ります。しかし誘致運動の立ち上げや初期において、彼が運動を主導したことはまちがいないといえます。このように竜東の村々は村長はじめ村をあげた取り組みであったのにたいして、竜西の村々には先述したように村長が出ているところは一つもありません。たとえば市田村で同盟会の有志委員として活動するのは、松島喜代太郎、橋都多賀司、林藤四郎、坂牧直助といった人たちですが、すべて下市田地区の人たちです(松島が区長)。吉田地区、牛牧地区、上市田地区、出原地区、大島山地区の人は1人もいません。これらの地区は上線沿いであるか、地区内に上線と下線の両方があるので、運動には加われなかつたのでしょうか。おそらく上片桐村、大島村、山吹村、座光寺村から出ていた委員も同様で、下線の利益を代弁する人たちではなかつたかと思います。これらのことから、この下線誘致運動は下伊那北部の竜東の村々とくに神稻村や河野村が主導し、それに竜西で下線に賛同する人々を加えて行った運動といえるでしょう。

電車の路線問題について、下市田の同盟会有志委員の記録には、大正6年はこの後とくに大きなことはなかつたとあります。しばらく会合も開かれなかつたようです。そして大正7年(1918)になり、委員のなかから「そろそろ協議会を開いたほうがよいのではないか」との声があがり、橋都多賀司が片桐良弥に相談しますが、「そのうち会合を開く。下線に問題はない。」と言つばかりで、会合をおこなう気はないようです。それならばと座光寺村と相談し竜西のみで集まろうということになります。橋都は片桐のこのような姿勢をみ

て、竜東の村々は重い負担に耐えられなくなってきたのではないかと記録しています。このころより竜東と竜西の取り組みに温度差が出てくるようになり、竜西のみで会合を開き、竜東に対する意見をまとめたりするなど相手方への対峙方や方針を相談することがしばしばありました。

大正7年4月14日には伊那電の池上社長より意見を聞きたいという要請があり、上京委員3名が東京の本社で社長と懇談しました。ここで社長は上線と下線の工費を比較した資料(表1)を示し、下線は将来有望であることは認めつつも、工費における差は大きいので話し合いたいと言いました。その後、同年4月21日には社長が飯田町に来ることになり、各村1名ずつ委員が面会することになりました。伊原五郎兵衛専務も同席しました。ここで社長は上線と下線を比較し、上線は比較的緩行地なので工費が安くすむが、下線は勾配がきつい所がありそこは動力を要すること。また土地の買い上げ費用も違いがある。しかし電車の効力についてはそれほど大きな差はない。会社側からすれば、多額の費用を使って下線を採用するだけの必要があるかどうか問題であるといいます。しかし諸君の誠実で熱心な御希望があるので、経済の許すかぎりは下線にしたいと考えているといいました。ただしと続けて、これについては、諸君の十分な御援助をお願いしないわけにはいかない。覚悟をもって、用地買収においても諸君の御援助をもって遂行したいといいました。会社としては、下線は経費がかかるが、用地買収などで同盟会の人々が協力してくれれば下線でよいというのです。同盟会の人々は下線実現の手ごたえを感じたことだと思います。記録を残した委員は、社長のいうことは全く正当であり、その意を得ていると書き残しています。社長は、買収見込み価格は土地の時価をもとに会社で算定し、近日中に渡すといいました。このあと会社から示された買収単価が予想より低額だったので、代表者が飯田にいる社長を訪ね、折衝したり各村ごと協議したりしました。

5月になって代表者が伊原と買収単価のことで相談し、その結果を14日に集会で報告しました。伊原は、諸君の希望にできるだけ沿う考えだ

が、路線の決定後、諸君が冷淡な態度になつたら自分が立場を失うので、それが気がかりだと言つたそうです。それに対して代表者たちは、いささかも貴様の立場を損なうようなことはしない、十分責任を負担するつもりだと答えました。については「全線ニ對シ金四万円ヲ提供シテ会社ノ直轄ニ依ルカ、又ハ表ニ示サレタル買収単価ニヨリ関係部落ノ實際ニ依ルカ何レモ示途ニ依リ御答可致申述候処」とあり、これは同盟会より全線に4万円提供し、会社が直接用地買収交渉にあたるか、それとも表で示された買収単価で各地区ごとに交渉にあたるかどちらがよいかお答えくださいと伊原に尋ねたのだと思います。それに対して伊原は私としては後者がよいと答えました。会社は直接各地主と用地交渉にあたるよりも、それは同盟会に任せたほうが得策だと考えたのです。伊原は、どちらがよいか各地区ごと決意を決め、その結果を15日昼までに知らせてほしいといいました。知らせが来たら返電するので、委員2、3名が上京してほしいといいます。上線か下線かの路線決定は17日の重役会で決まるといいうのです。同盟会の委員たちはいよいよ最後の時だと決意を固め、どちらの方法になつても伊原氏に迷惑をかけないように決定することを確認し、代表者たちは決議書を作成し、それに記名捺印しました。この決議書の要旨は、15日に今村禄七郎（座光寺村）が伊原へ打電することになりました。そして上京委員を決め、上片桐・大島・山吹から1名（山吹村の高野保次郎）、座光寺・市田より1名（今村禄七郎）、竜東から1名これは片桐良弥が病気のため大原慶一としましたが、当日本人欠席のため未定となりました。最後に、この大事業に対する対応では、子孫のため、地方のため、およびかぎり尽力することを申し合わせて解散しました。彼らの強い意志と気分の高揚が伝わってきます。なおこのときめた決議書では、会社に交渉するについての義捐金の出し方を協議しました。事業主による寄附金は5千円としていましたが、まだ未定なので他日実収を待つて決定することにし、合計金4万円は「既定ノ歩合ニ拠リ」算出することにしました。これは以前の各村の負担割合（表3）のことと思われます。

そして5月17日、伊那電の重役会で路線が下線に正式決定されます。この重役会の経過や様子については記録の中で何もふれていないのでわかりません。19日には伊原の連絡を受けて上京した3人の委員（座光寺村の今村禄七郎、山吹村の高野保次郎、大原の代理と思われる山吹村の寺澤隈太郎）が11ヶ村の代表として、池上社長、伊原専務との間で仮契約書をかわしました。その内容は、まず初めに「龍西線沿ヘニ電車敷地ニ付、左ノ條項ヲ契約ス」とあり、龍西線（下線）に正式決定されたことが記されています。そして次のことをきめました。

- ・同盟会は別表の土地価格をもって土地買収を担当し、会社の施工に影響を及ぼさないよう責任をもって行う。
- ・同盟会は停車場4ヶ所の用地として、4千坪（1ヶ所千坪）を限度に会社に寄付する。その停車場は、大島停車場、山吹停車場、市田停車場、座光寺停車場の4ヶ所とする。会社が選定した停車場の位置については、同盟会は口出ししないこと。
- ・会社が実測して出した地目筆ごとの単価に異議をとなえないこと。

本契約書は、これと同じ内容のものを11ヶ村の代表者と5月30日までに結ぶことになりました。そして5月26日に神稲郵便局で上京委員の報告会があり、その後、場所を河野村の橋本屋に移し、上京委員の慰労会で祝杯をあげました。

こうして同盟会は伊那電の下線への敷設という目標を実現できたのですが、その根底には会社側と何度も懇談を重ね、池上社長や伊原専務と信頼関係を深めたことがありました。会社側としては、下線のほうが上線より工費はかかるにかかりますが、用地買収交渉というもつとも大変な作業を同盟会にまかせることに成功しました。郡のなかで下線を望む意見が大勢となっていたため、会社側の利益だけで通すのは無理があるという判断があったのでしょうか。同盟会の主張に理解をしめしつつ、「諸君の協力が必要だ」とくりかえしい、暗黙のうちに用地買収交渉の担当や停車場の用地の寄附を求めていました。同盟会の側としても、それは理解した上でのことでのことであると

20数年前、中央線の誘致合戦で伊那谷は人口や経済力において自分たちの優位性が圧倒的であることを主張しながら、結局は建設費の差で敗れたことが頭にあったのかもしれません。竜東の村々を中心に、自分たちも応分の負担が必要なこと、身を切る覚悟ができていました。こうした両者の思いが契約に至ったのだと考えます。

その後、大正8年2月には、ふたたび電車敷設についての各村の負担額を決めて誓約をかわしています。負担金額は4万円で、これを2万5千円は竜東6分・竜西4分、残り1万5千円は竜東4分・竜西6分で負担するとあります。そして各村の負担割合は大正6年に申し合わせた割合、金額と同じです。その金額は土地や家屋の買収に際して「不相当安価ノ個所」にあてること、停車所の土地家屋の買収には事業所からの寄附金をあてるここと、土地家屋の買収には各村委員が責任をもってあたることなどを誓約しています。竜東の村のなかには、このように竜西よりも重い負担が続くことに疑問や反発が生ずることもありました。たとえば停車所4千坪の土地を同盟会が寄付することになりましたが、大正7年6月に、河野村から停車所の利益をうけるのは竜西の地元なので、その地元が負担すべきではないなど竜西と竜東の負担割合への疑問があげられました。それに対して竜西の村々は、停車所の土地を寄付することは電車を下線に持ってくる条件だったので、それは同盟会全体で負担しなくてはならないと言って説得したりしました。このように竜西と竜東で対立、分裂の危機をたびたびむかえましたが、そのつど話し合って乗り越えていきました。たとえば竜西では、竜東の反発が見られるたびに竜西だけの集会を開いて対応を協議していました。もっとも竜東の重い負担、とくに神稲村が突出して負担が多くそれに河野村が続いているのは、下線に鉄道がくれば竜東にも近くなるという理由だけではないのでしょうか。それは停車所の位置もあったと推測します。たとえば市田駅は出砂原におかれましたが、そこは神稲村の田村からは明神橋を渡ってすぐの位置です。当時の出砂原は名前の通り、岩がごろごろした草山と松林ばかりのところで、家もわずかしかありませんでした。

当時の下市田でもっとも人家が多かったのは竜西線ぞいの地域です。そこに駅を作れば多くの人が利用しやすいだけでなく、となりの山吹駅や元善光寺駅からもあまり勾配の変化なく来れるのではないかでしょうか。出砂原に停車所ができたのは、契約書のあったように停車所の位置を決めるのは伊那電なので、神稲村が伊那電にはたらきかけた結果ではないかと推測します。同様に山吹停車所も、河野村からは万年橋を渡って少し行ったところです。これも山吹村の中心からみれば、だいぶ北東にあります。これまた河野村の要望によるものではないでしょうか。あくまで推測の域をでませんが、これだけ偏った負担割合を続けているのをみると、そうしたことに対する考え方があらわをえません。

四 用地買収交渉

期成同盟会の委員たちは、伊那電と契約書を交わすと、さっそく線路や駅の潰れ地の地主たちとの用地買収交渉にとりかかりました。これはそれぞれの村ごとに委員と地主で交渉をおこなったようです。しかしこの交渉は、会社の示した買収単価と地主の要望に開きがあり、何度も会合を開きましたが、なかなか話し合いは進みませんでした。そのうちに大正8年(1919)3月、大島村、山吹村、吉田村、市田村の地主たち133名から伊那電の池上社長宛に請願書が提出されました。その内容は、時価相当の相場で買収をすること、道路、用水路、堤防、河川などに関わる部分の潰れ地にも十分な配慮(補償など)をすること、そして今後の交渉は会社と地主側で直接おこなうことなどです。これは、地主たちが用地交渉から同盟会を排除して、自分たちが会社と直接交渉することで、自分たちや地域の利益を守ろうとした動きでした。座光寺村などふくまれていない村もありますが、地主たちの組織化が進んでいたようです。これに対し池上社長は地主たちに、伊那電の路線が下線に決まったのは同盟会の有志たちの尽力によるものであり、また用地買収は同盟会が受け持つという協定もあるので、請願書はいったん地主たちに戻すと返答しました。同盟会の人々にも、地主たちから請願書がとどいたが、今

まで通りあなたたちとの結んだ協定を大事にして円満に進めていきたいので送り返したことを手紙で告げました。同盟会の委員たちとの契約、信頼関係を大切にする姿勢をしめしたわけです。

そうはいっても土地買収が進まないと、工事の着工はできません。伊那電は私鉄ですが、郡会は下伊那の交通問題をたびたび議題に取り上げ、その遅れを郡の最大の課題とし、伊那電にも公費で援助をしていました。また郡会から県に請願を繰り返し、県からも伊那電に補助金がおりていました。それゆえ、工事が予定通り進まないと郡や県からたびたび催促がありました。大正9年（1920）1月13日には池上社長から、同盟会の橋都多賀司に、土地買収が遅々として進まず工事が計画より遅れ、県や郡の命令もあり困っている、用地交渉がいつまでに完結できるか教えてほしいという手紙がきています。その後、交渉の進展がみられたようで、同年10月25日の同盟会の橋都多賀司と坂牧直助から会社宛（池上社長か伊原専務宛と思われる）の手紙には、単価の倍増ということで地主たちと内々に交渉をすすめ、はじめは容易に応じてくれなかつたが、ついに大部分の地主の内諾をえることができたこと、残るは山吹村の一部の地主と座光寺村であること、これら内諾者の気が変わらないうちに急いで契約をすませてほしい、そうすれば座光寺村の地主たちも大勢をみて契約に応じてくれるだろうといっています。単価の倍増の金額で交渉が急速に進展したことがわかります。同盟会の委員たちが交渉に苦労した原因の一つに、この時期、物価の変動が大きく、とくに土地の騰貴が激しかったことがありました。そのため単価の倍額ということで会社の了承をとることができたのでしょう。この後まもなくして、山吹村の一部と座光寺村の地主の内諾もとれ、工事に取りかかれるようになったようです。

五 おわりに

以上みてきたように、伊那電は飯島以南の路線については、当初上線（三州街道沿い）を考えしていましたが、上伊那南部と下伊那北部の村々が同盟会を組織して天竜川西側の下線に誘致する運動を進めたことにより、下線に決定しました。こ

の運動は神稲村を筆頭に竜東の村々が主導しなかでも神稲村や河野村は寄付金を多く負担していました。ときには竜東の村々と竜西の村々で運動の考え方や取り組みに温度差が出てくることもありましたが、そのつど話し合い結束を強めていきました。そして郡会にも働きかけて下線を郡全体の意見とし、会社側（伊那電）とも何度も話し合いをかさね、信頼関係を作っていました。そして会社としても下線は上線よりも工事費はかかるが、同盟会が用地買収交渉を受け持ち、また停留場の土地を同盟会から会社に寄付するという条件で同盟会の主張を認めることになりました。その後、同盟会の人々は用地買収交渉に取りかかりますが、会社と地主の間にはさまって困難な交渉となりました。時間がかかりましたが交渉をまとめ、ついに飯田町まで鉄道が完成しました。県下でもっとも鉄道が走るのが遅れた郡の一つであった下伊那にも、やっと鉄道がくることになったのです。さまざまな困難を乗り越え、鉄道の下線への実現はたした同盟会の人々を支えたのは、子孫のため、また自分たちの地域の将来のためにやっているのだという思いだったことがわかります。

【使った資料】

- ・松川町上新井区有文書（松川町資料館所蔵）
- ・高森町下市田区有文書（高森町下市田区所蔵）

【参考文献】

- ・伊坪達郎「伊那電下伊那入郡と人々の運動」（南信州新聞 2021年1月5日）
- ・同 「伊那電松川町通過の歴史」（『松川町公民館報まつかわ』第686号～689号 令和3年1～4月）

※ ※ ※ 令和4年度の記録 ※ ※ ※

利 用 団 体 名 称 と 人 数		
4月	町内	資料館調査委員会(11) 古文書研究会(18) 高森町史学会総会(20) わかば勉強会(7) 高森町史を読む会(18) 天理教ボランティア(9) 資料館運営委員会(3) 音読の会(5) 牛牧歌会(5) 白夜短歌会(9) 井上井月下伊那支部(6) 美人画教室(4) 気学の会(9) きさらぎ会(6) 源氏物語講読会(15) 松岡城址愛護会(5) 滝里歌会(12) 布喜の会(15)
	町外	なし
5月	町内	きさらぎ会(7) 音読の会(5) 高森自由大学(7) 高森町史を読む会(18) 高森中3年生(24) 井上井月下伊那支部(5) サイエンスキッズ(23) 高森町史学会研修旅行(31) 滝里歌会(11) わかば勉強会(6) ひだまりの会(6) 古文書研究会(18) 牛牧歌会(6) 源氏物語講読会(14) 短歌歩道の会(6) 気学の会(6) 南信州BC(14) 白夜短歌会(6)
	町外	なし
6月	町内	源氏物語講読会(14) 短歌歩道の会(6) 気学の会(9) 井上井月下伊那支部(6) 滝里歌会(9) 白夜短歌会(8) 牛牧歌会(7) 古文書研究会(20) 資料館調査委員会(11) 南小6年2組(28) 南小5年4組(28) 北小クラブ(11) 資料館活用委員会(8) 音読の会(4) 飯下建設労連(29) ひだまりの会(4) わかば勉強会(6) 高森町史を読む会(18) きさらぎ会(7)
	町外	駒ヶ根つくば開成学園(22) 平出博物館(6)
7月	町内	きさらぎ会(6) 白夜短歌会(7) 資料館活用委員会(7) 井上井月下伊那支部(3) 南小5年生(31) 南小4年生(31) 時の駅講座(35) 音読の会(3) 気学の会(6) 牛牧歌会(6) 高森町史を読む会(17) 古文書研究会館外研修(16) 滝里歌会(9) 夏休み親子体験教室(80) ひだまりの会(2) 北小6年生(30) 短歌歩道の会(5) 高森BC(39) 源氏物語講読会(8) 北小クラブ(5) 南小6年生(78)
	町外	飯田女子短大(11) 南信州観光ツアーパー(14) ユタ日報松本研究会(6)
8月	町内	気学の会(9) 滝里歌会(9) きさらぎ会(6) 高森町史を読む会(10) 牛牧歌会(4) わかば勉強会(6) 夏休み親子体験教室(26) 白夜短歌会(7) 源氏物語講読会(12) 古文書研究会(16) 高森町史学会幹事会(10) 松岡城址愛護会(9) 北小クラブ(5) 短歌歩道の会(6) 少年野球保護者会(8)
	町外	下伊那教育会地理委員会(11) エコール親愛(37) みらい福祉会(13)
9月	町内	音読の会(7) 白夜短歌会(8) きさらぎ会(7) 短歌歩道の会(5) 古文書研究会(15) 資料館調査委員会(11) 高森町史を読む会(12) 資料館運営委員会(5) 気学の会(5) 北小クラブ(4) 源氏物語講読会(13) 時の駅講座(11) 牛牧歌会(7) 滝里歌会(9) 高森BC(9) 井上井月下伊那支部(8)
	町外	南信州観光公社「井月吟行巡り」(14) 伊賀良公民館(10)



鯉のぼり掲揚



伊賀良公民館見学



町歌碑移設

利 用 団 体 名 称 と 人 数		
10月	町内	気学の会(7) 源氏物語講読会(12) 短歌歩道の会(5) 古文書研究会(17) きさらぎ会(7) 松岡城址愛護会(8) わかば勉強会(4) 北小クラブ(11) 柿姫クラブ(17) 白夜短歌会(7) 高森町史を読む会(15) 高森町自然愛護会(23) 滝里歌会(11) 牛牧歌会(5) 音読の会(5)
	町外	松尾小3年生(126)
11月	町内	柿の里ウォーキング(19) 高森自由大学役員会(4) 高森町史を読む会(13) 气学の会(7) わかば勉強会(7) ひだまりの会(4) 音読の会(4) きさらぎ会(6) 源氏物語講読会(11) 滝里歌会(9) 古文書研究会(16) 短歌歩道の会(5) 牛牧歌会(6) 白夜短歌会(7)
	町外	JRさわやかウォーキング(16) 南信州観光ツアー(11) 御前崎市議会(14)
12月	町内	第3回時の駅講座(29) 高森自由大学(16) 古文書研究会(15) 牛牧歌会(5) 气学の会(8) 白夜短歌会(8) 高森町史学会幹事会(7) 滝里歌会(9) 源氏物語講読会(11) 音読の会(3) 高森町史を読む会(11) わかば勉強会(6) 短歌歩道の会(5) きさらぎ会(7) ひだまりの会(3) 高森BC(35)
	町外	なし
1月	町内	短歌歩道の会(4) 高森町史を読む会特別講演会(36) 小正月飾りづくり(22) きさらぎ会(7) 資料館調査委員会(10) 源氏物語講読会(15) 牛牧歌会(6) 音読の会(6) 古文書研究会(18) 白夜短歌会(10) 布喜の会(16) ひだまりの会(1) わかば勉強会(7) 資料館運営委員会(4) 飯田線百周年実行委員会(11) 气学の会(11) 滝里歌会(11)
	町外	なし
2月	町内	源氏物語講読会(12) 南小4年生(30) 北小3年生(24) 滝里歌会(11) 資料館活用委員会(9) 高森自由大学役員会(8) きさらぎ会(7) 音読の会(6) 松岡城址愛護会(7) 短歌歩道の会(4) 古文書特別研究会(19) 飯田線百年フォトコンテスト表彰式(18) 布喜の会(22) 牛牧歌会(5) 高森町史を読む会(13) ひだまりの会(5) 气学の会(6) 白夜短歌会(9)
	町外	なし
3月	町内	井上井月冊子刊行報告会(7) 高森町史を読む会(12) 資料館調査委員会(8) 气学の会(7) 飯田線学習会(50) 短歌歩道の会(4) 源氏物語講読会(14) 白夜短歌会(9) 牛牧歌会(6) 南小3年生(117) 古文書研究会(16) ひだまりの会(6) きさらぎ会(7) 滝里歌会(10) わかば勉強会(7) 高森BC(23) 布喜の会兎作り教室(34) 資料館運営委員会(4)
	町外	豊丘史学会(15、割引1,500円)



松尾小見学



長野銀行当館寄付贈呈式



御前崎市議会見学

入館者数：令和4年度及び昭和54年11月の開館以降の累計 3月31日締

★令和4年度	6,353名（町内 4,585名 町外 1,768名）
★開館以降の累計	278,541名（町内 218,013名 町外 60,528名）

令和4年度 資料寄贈者御芳名

品名	寄贈者	品名	寄贈者
知覧特攻平和会館紀要他	下市田 三石睦夫	民具（座操り器他）	飯田市 矢島勝幸
熊谷家伝記7冊・信濃郷土研究6冊	下市田 松島悦男	温度計（鞘・展示台など含む）	吉田 片桐治彦
農具一式（千歯こき他）	大島山 後沢節子	大正時代内裏・雛人形	吉田 中塚春子
足袋2足	下市田 宮下清秀	其残筆屏風1双	吉田 本島美智子
なぎなた・短刀各1振	千葉市 横瀬信雄	お歯黒盤・鏡・算盤他	下市田 安養寺(松岡泉岳)
組み紐制作台（丸台・角台）	吉田 星野ヒロ子	山吹・市田駅開業100年記念グッズ	飯田線100周年実行委員会

令和4年度寄贈本一覧

成田夕紀子『夫 成田青畔』	高遠書房	史談会だより 40号	下市田史談会
吉川芳夫『郷土の偉人』	飯田信用金庫	本島恭則氏所蔵書籍	本島美智子
飯田線の60年（郷土出版社）	町民の方より	童話集3『湯が洞の銀ぎつね』	宮下澄子
抜萃のつづり その八十二	クマヒラ・ホールディングス	『信州の美術 近代絵画の系譜』	
一ノ瀬武志『手紙で読み解く井月の人生』 (ほおづき書籍)	一ノ瀬武志	『続 信州の美術 近代彫刻・工芸・版画の系譜』 (毎日新聞社)	中村忠敬

資料館寄託資料

古文書類 5箱	出原 宮下昭	古文書・書籍類	山吹 倉田雅子
古文書類 1箱	山吹 三石俊彦		

資料館からのお知らせ

1 古文書研究会・高森町史を読む会 会員募集

◇資料館「時の駅」では、「古文書研究会」(毎月第3木曜)と「高森町史を読む会」(毎月第4木曜)を行っております。それぞれ、20余名の皆様での学習会になります。どちらの会も、一緒に参加して下さる方の加入をお待ちしております。年度途中でも構いません、興味のある皆様、ぜひご連絡ください。

(資料館「時の駅」 TEL: 35-7083)



2 古文書・古い資料を捨てないで、資料館にぜひ一報を！なつかしい昭和の物も！

◇皆さんのお家に眠っている古文書類などの古い資料は、歴史を解き明かす大事なものです。今まで「古いもので何だかわからない」と捨てられたり燃やされてしまったという話を耳にしました。大変残念です。

江戸時代・明治時代の古文書類はもちろん、古い書籍、写真、軍事郵便などの戦前の資料等々捨てる、燃やす前に資料館へご一報を、ご相談を！お願いいいたします。また資料館では、最近昭和の物も収集しており、ワープロやファミコンなどの寄贈をうけました。そうした物も大歓迎ですので、ご連絡ください。大切に活用させていただきます。

編集後記

「ウィズコロナ（アフターコロナ）」が現実になりつつある中、感染対策に留意しながら、今年も特別展や企画展、時の駅講座などの活動が計画通りできたこと、また親子体験教室も人数制限はしたものの多くの皆様がご参加くださったことは何よりも嬉しいと思います。特に今年度は、地元の小中学校との連携がより深く・強くできつつあるとの実感がわく1年間でした。この流れを定着させ地域に根差した後継者育成に一役買えたら、「時の駅」にふさわしい資料館の活動が展開できるのではないかと考えています。（竹内稔）